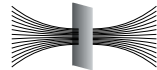


活用のアプローチ

・ ・ 視 点



品質工学を導入した企業や組織は少なくない。成果を上げた事例も数多くある。また、成果を持続的に上げ続けている企業もある。その一方で、「導入したままよくわからずに終わった」「一度導入して実験はやったが成果がでずに頓挫してしまった」「取り組んだテーマで一応の成果は出たが、次のテーマでの取り組み方がわからず続かない」こうした声も少なくない。品質工学自体が、技術開発のための理論と手法が揃った強力なアプローチであることに疑いない。しかしながら、活用上で、現実とのギャップもあるようである。成果に結びつけるには、“アプローチの仕方”や“活用の工夫”も重要であろう。品質工学の活用のギャップやアプローチを多角的に整理し、成果につなげるためのヒントを共有したい。

一活用や実践，継続の話題は会員の多くが以前より所有する悩みであると思う。

一確かに品質工学を初回のテーマで活用し一旦成果が出ると、そこで終わりと考えがちである。あとは応用で対応できると思い込み、継続的な活用が途絶えてしまう。持続的に活かすには、もうワンステップの工夫が必要であろう。

一もちろん、品質工学を活用して一旦成果が出たのであれば、それ自体は評価すべきである。その後の活用をどう進めるかは、マネージャーの判断に委ねられる場合が多い。

一品質工学の活用が一過性のようなものとなっているのは、問題解決で終わっているケースが多いのではないだろうか。活用が問題解決、いわゆる火消しだが、火が消えてしまえば防災道具は使わない。何か起こった時に使えばよい。品質工学が提唱する未然防止までは進展できていないということか。

一歴史的には問題解決をきっかけに品質工学や田口の思考が進化してきたところもある。歴史的な途上にいる相談者と、進化した先にいる指導者のギャップがあるように思う。

一品質工学の指導を受けて、いろいろ経験した後に、やっと田口玄一の言わんとするところがわかるというのが品質工学の難しさである。

一「品質工学は問題解決をしません」、「品質工学は最適化の手法ではない」と言われ続けているはずなのに、その意味が広く認知されていないのはなぜだろうか。

一品質工学に限らず、さまざまな技術的手法も最後は問題解決型として使われることも多いと感じる。ではなぜ品質工学が問題解決型では適切でないかという点が、使用者に適切に伝わっていない気がしている。また成功している企業でも、かなり属人的なところがあるように思えてならない。たとえば推進者が退職をしたり人事異動で担当者が変わると、進捗にブレーキがかかったり、そのまま消滅することも多いように感じる。

一相談をしてくる中小企業でも、感覚的には9割程度が厳しいと感じることがある。品質工学の理念や方法論は見事だから、その内容や成果をWebなどで見て相談をしてくる例によく当たるが、実際は測定や実験のノウハウも必要であり、解析技術などもある程度理解していないと活用できないことも多く、自ら相談を持ち掛けておきながら半分も進んでいない段階で理由をつけて断ってくる企業も少なからずある。

一このような企業はテンプレートのようなになぞればできると思っているところがあり、そうならないとダメなようであるが、そのようなケースは当事者が品質工学の成功面だけを見て、自分では全く勉強を